The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	先秦～秦漢代
Author(s)	近藤, 浩之; 西, 信康
Citation	中国研究集刊. 2013, 56, p. 2-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58716
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 號号（総五十六号）平成二十五年六月 二―一三頁

〔特集一〕

〔学界時評〕先秦～秦漢代

近藤浩之
西信康

新しい『中国思想史』の試みと出土資料研究

大学で中国哲学・中国思想を講義する教育現場に携わる者にとって、非常に有益・有用な思想史概説書が出版されて、たいへん喜ばしい。湯浅邦弘編著『概説 中国思想史』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）、同『名言で読み解く 中国の思想家』（ミネルヴァ書房、二〇一二年）、井ノ口哲也『入門 中国思想史』（勁草書房、二〇一二年）などがそれである。いずれも若手・中堅の研究者が主体となって執筆し、新しく清々しい中国思想史の息吹を感じさせる好著である。しかも、特に先秦～秦漢に関して言えば、これらの思想史概説書では出土資料研究への言及と配慮が十二分に施されており、それが新しい息吹を感じさせる大きな要因となっている。井ノ口前掲書第四章「出土資料研究の影響」に云うように、今や、先秦～秦漢（そして六朝ごろまで）の思想史研究は「出土資料を度外視して研究をすすめることが、もはやできなくなってきている」し、出土資料は「伝世資料で構築されてきた定説を覆す可能性がある。中国思想史の書き換えが、今まさに要請されている」わけだが、その重要性を一般の学生や読者にわかりやすく伝える事は、いままで非常に困難であった。その困難を解決するものとして、『概説 中国思想史』（前掲）ではテーマ別構成の第Ⅱ部に編集の知恵と特色が顕著に現れているが、就中、第十四章「文字学」（福田哲之）、第十五章「新出土文献

学」（草野友子）が画期的で、中国思想史における出土資料研究の現状と意義を、「参考文献」（短いコメント有り）も附けて簡潔に解説している。『入門 中国思想史』（前掲）では全十三章のうち通史の十一章以外に、第四章「出土資料研究の影響」と第十一章「学術の分類と目録学」という特別な章を設けていることが注目されるが、その記述も要点・問題点を的確に押さえ、簡潔ながらも著者の学識の豊かさと確かさを背景にした筆致で快く、読むほどに非常に優れた概説であるとわかる。とりわけ第四章二「通行本（伝世本）と出土本の比較研究」で、出土資料が投げかけた中国思想史上の重要テーマを（一）天人の分、（二）焚書と『易』（後に詳述する『易』の経典化の問題を参照）、（三）『老子』、（四）その他（『緇衣』『性自命出』『儀礼』『論語』『尚書』『孫子』など）として紹介するのは気が利いている。第四章三「出土資料研究の問題点」に至っては、その（一）「研究者の姿勢（筆者の経験から）」として、「未見のきわめて重要な出土資料が新たに公表されるたびに、それへと関心が移って研究するのは時代の要請であるとしても、その結果、それまで研究されてきた重要な出土資料が一時的にでも置きざりにされる事態は、よいことであろうか」という学界のだれもがどこかで感じているような疑問と反省を、忌憚なく述べているのは見事である。よいかわるいかは分からないが、かく言う私は、陸続と出土する重要な新出土資料を追いかけきれず、自ら能力の不足を嘆き恥じながらも、時に仕方なく時に敢えて積極的に、出土資料としてはすでに「置きざりにされている」感のある馬王堆漢墓帛書を研究し続けている。新しいものに飛びつけない自嘲と自負が綯い交ぜになったまま。しかしいずれにしても、馬王堆漢墓帛書は、決して「置きざりにされ」てなどいないし、また「置きざりにされ」るべきものでもない。これまでも、そしてこれからも、新たな出土資料が中国古代思想史の書き換えを迫るとき、馬王堆漢墓帛書は必ず見直される。なぜならば、まず帛（絹の布）という媒体に書かれた内容が、竹木簡に書かれた他の資料よりも格段に豊富でまとまった情報（一篇ごとに通行することが多い竹木簡よりも、一書物としてのまとまりと完成度の高さ）を提供しているからであり、次に成書時代がおおよそ戦国後期～漢初という、今に伝わる多くの先秦文献（具体的には『老子』『周易』『戦国策』などの伝世文献）がその形に編纂され完成する時期と相前後して重なることが確実だからである。「学界時評」としては非常に狭い知見で恐縮だが、以下試みに、『易』の経典化の問題をめぐって、新出土資料

が如何なる思想史の書き換えを迫り、馬王堆漢墓帛書『周易』がそれに如何に関わり如何に見直されているかを述べてみよう。

『易』の経典化の問題をめぐって

この問題をめぐって、近年盛んに論著を発表されているのが浅野裕一氏である。まず浅野裕一編『竹簡が語る古代中国思想（三）―上博楚簡研究―』（汲古選書51、汲古書院、二〇一〇年三月）の第十一章「儒家による『易』の経典化」は、真正面からこの問題を扱った力作である。また、特に最近の浅野裕一・小沢賢二『出土文献から見た古史と儒家経典』（汲古書院、二〇一二年八月）に収められた第五章「孔子の弁明―帛書易伝「要」篇の意図―」（初出は『学林』第五十三・五十四号、二〇一一年一二月）及び第六章「五十歳の孔子―「知天命」と「格物致知」―」（初出は『東洋古典学研究』第三十二集、二〇一二年三月）は、『易』の経典化とその原因を論じた浅野氏の一連の論文の総まとめになっているように見受ける。話を『易』の経典化に絞って、浅野氏の見解の重要な論点と結論をまとめれば次のようになるだろう。

（論点1）戦国中期、前三〇〇年頃の楚墓から出土した郭店楚簡『六徳』（「觀諸詩書則亦在矣。觀諸禮樂則亦在矣。觀諸易春秋則亦在矣。」）や『語叢』一（「易所以會天道人道」「詩所以會古今之志者」「春秋所以會古今之事也」）の発見により、遅くも戦国前期（前四〇三～前三四三年）には、儒家の中に『易』を経典視する思考が存在していたのは確実である。（浅野・小沢前掲書、一六四、一六五、一七五頁）

（論点2）戦国中期（前三四二～前二八二年）の楚墓から伝世本とほとんど同じ内容の『周易』（すなわち上博楚簡『周易』）が発見された結果、遅くも戦国前期には伝世本と大差ない形で『周易』が存在していた状況が判明した。したがって津田左右吉説や近藤浩之説（戦国中期以前にはまだ卦名が存在していなかったとか、卦辞や爻辞が定型化し始めたのは戦国中期末以降で、戦国最末までの間に急速に定型化したのではないかとの説）が成り立つ余地は完全に消滅した。（浅野・小沢前掲書、一六五頁）

（論点3）馬王堆三号前漢墓（造営時期は前一六八年）から出土した帛書『周易』に附属する易伝（二三子問・繫辞・易賛・要・繆和。昭力など）は、遅くも戦国後期（前二八一～前二二一年）にはすでに著作されていたと

見なければならない。これらは、各種の易伝を著作して『易』と孔子を結び付ける営為が戦国期から着々と進められてきた状況を示している。したがって、繫辞伝・文言伝は「誠」を説く『中庸』後半と同じく秦の始皇帝による統一後の成立だとした武内義雄説や、繫辞伝の成立時期を秦漢交代期（特に前二一三の焚書より後）とした金谷治説が成り立つ余地は、完全に消滅した。（浅野・小沢前掲書、一六五、一六六頁）

（論点４）馬王堆帛書易伝「要」篇には、孔子晩年の『易』への傾倒に対する子貢の批判と、それに対する孔子の弁明が記されているが、（徳義を重んじる孔子が筮占のマニュアル本に過ぎない『易』に傾倒する矛盾を解消するような）その論理展開から考えると、「要」篇の目的が『易』を四経（『詩』『書』『礼』『楽』）に追加して、新たに経典としての地位を与えるところにあったのは明白である。（浅野・小沢前掲書、一九五、二〇二頁）

（論点５）孔子と『易』を結び付ける最古の資料は、『論語』述而篇（「子曰、加我數年、五十以學易、可以無大過矣。」）と子路篇（「子曰、南人有言曰、人而無恆、不可以作巫醫。善夫。不恆其德、或承之羞。子曰、不占而已矣。」）とに見える。ここで孔子は、明らかに『易』の文句（恆卦九三「不恆其德、或承之羞、貞吝」）を引き、それに論評を加えている。したがって孔子は、「五十以學易、可以無大過矣」との言葉を実行に移し、『易』を学んだのだと見なければならない。（『竹簡が語る古代中国思想（三）』前掲、三三六頁）

（論点６）儒家が『易』を経典視した原因としては、『孟子』万章上篇（「匹夫而有天下者、德必若舜禹、而又有天子薦之者。故仲尼不有天下。」）や『墨子』公孟篇（「公孟子謂子墨子曰、昔者聖王之列也、上聖立爲天子、其次立爲卿大夫。今孔子博於詩書、察於禮樂、詳於萬物。若使孔子當聖王、則豈不以孔子爲天子哉。子墨子曰、夫知者、必尊天事鬼、愛人節用。合焉爲知矣。今子曰、孔子博於詩書、察於禮樂、詳於萬物。而曰可以爲天子。是數人之齒而以爲富。」）によれば、孔子は（天地・万物に通暁し）「詳於万物」だったと宣伝する必要が生じ、孔子が『易』に精通していたとする話が作られ、結果として『易』が経典中に追加されたとの流れになる。その際、後学の徒は今本『周易』の十翼や帛書『周易』に見られるような易伝を著述して、それを孔子自身の易学の成果であるかのように偽装した。また、易伝を作った孔子を、伏犠→文王と続く（作『易』の）聖王の系譜に組み込むが、その系譜自体も儒家がそのために捏造した疑いが残る。（『竹簡が語る古代中国思想（三）』前掲、

三三七～三三九頁、浅野・小沢前掲書、一六六～一六八頁）

（論点7）帛書『周易』「要」篇の「後世の士の丘を疑う者は、或いは易を以てするか」とか、『孟子』滕文公下篇の「我を罪する者も、其れ惟だ春秋か」と、後世自分に非難が浴びせられるだろうと孔子に語らせているのは、経典の資格が何一つない書物を、むりやり経典にでっち上げようとした後ろめたさ、やましさの表出に他ならない。（浅野・小沢前掲書、一六九～一七〇頁）

（結論）『孟子』『中庸』『荀子』などの伝世文献に依拠する限り、儒家が戦国期に『易』を経典化していたとする確証は得られない。だがその一方で、郭店楚簡『六徳』や『語叢』一に、六経の一つとして『易』の名があり、遅くも戦国前期には、儒家の中に「易」を経典視する考えが存在していた。とすれば、孔子と経書を結合して孔子に聖人の資格を与えようとする経学史観形成運動には、孔子と『詩』『書』『礼』『楽』を結合する一派、孔子と『春秋』を結合する一派、孔子と『易』を結合する一派、孔子と「六経」全体を結合する一派など異なる流儀が存在し、分派ごとに尊重する経典にも違いがあり、様々な紆余曲折を経由しながら進行したと見るべきであろう。『易』の経典化を推し進めていた学派は、反対勢力の批判を封じるために「要」篇を著作し、反対派の主張を子貢に代弁させた上で、孔子の口を借りて批判に反論した。結局、この運動は功を奏し、戦国後期には「丘治詩書禮樂易春秋之六經、自以爲久」（『荘子』天運篇）と、『易』は『春秋』とともに儒家の経典に収まり、「六経」の考え方が定着するに至った。（『竹簡が語る古代中国思想（三）』前掲、三五一～三五二頁、浅野・小沢前掲書、一六九、一七〇、一七五頁）

さて次に、出土文献の思想史上の位置付けにおいて浅野裕一氏と見解が対立する池田知久氏の論文「『周易』研究の課題と方法」（渡辺義浩編『両漢における易と三礼』、汲古書院、二〇〇六年九月所収）などの見解の要点と私の補足的見解とを、右の浅野氏の各論点と比較できるように番号を対応させて示してみよう。

（論点1）『易』は（『春秋』が不安定な地位ながらも『荀子』書の中に経典として数えることがあるのに対して）、『荀子』もまだ全然経典と認めるには至っていない。したがって、『易』の儒教化が本格的に進行するのは、『荀子』以後の戦国末期～前漢初期と考えるべきであるし、また『易』を五経あるいは六経の中に含める文献が世に現れるのはその後のこと。（池田前掲論文、三四九頁）〔補足〕郭店楚簡『六徳』の記述によれば、六

経がそろっており、『易』は戦国時代後期には他の五つの経書とともに経書とされている。この時点で『易』が経書であったとするならば、『易』を解説する十翼（彖伝上下・象伝上下・文言伝・繫辞伝上下・説卦伝・序卦伝・雑卦伝）のすべてあるいは一部がすでにできあがっていたことを意味するのであろうか（井ノ口前掲書第四章二「通行本（伝世本）と出土本の比較研究」、四十八頁参照）。他の五経と並んで『易』の名が出ただけでは、十翼などの易伝ができあがっているとは考えられない。『詩』『書』や『春秋』の名だけではその伝がすでにできあがっているわけではないのと同じ。ただし「経典視する思考」が存在していたことは確実だろう。

（論点2）郭店楚簡と上博楚簡は、今日の中国の通説によれば、戦国中期の前三〇〇年以前の抄写であると見なされている。池田氏はこの通説には賛成せず、前二五〇年以降の戦国末期～前漢初期の成書と考える者である。（池田前掲論文、三六〇頁）〔補足〕いわゆる「引き下げ説」（池田知久）の立場と「戦国中期説」（浅野裕一）の立場の対立状況について詳しくは、『竹簡が語る古代中国思想（三）』（前掲）の第十二章「新出土文献と思想史の書き換え」三八四～三八六頁などを参照。私は出土時期や出土地が不明な上博楚簡の竹簡群の年代を一概に確定することは不可能だと考えるので、前・中・後期いずれかは決められないまま、上博楚簡『周易』はただ戦国時代のものとして扱うことしかできない。

（論点3）馬王堆帛書『易伝』六篇や後にそれを整理して成った通行本「十翼」は、基本的に荀子その人以後に世に現れた儒家の作品なのである（成書年代は戦国末期～前漢初期）。（池田前掲論文、三四九頁）

（論点4）帛書要篇の成書は戦国末期～前漢初期であろうから、孔子が晩年になって『易』を好んだとか「十翼」を作った（『史記』孔子世家）とかいう話は、歴史的事実に基づく伝承ではなく、前漢初期における『易』の儒教化・経典化が産み出したフィクション（神話・伝説）と見なして差し支えない。（池田前掲論文、三五二頁）

（論点5）宣帝の五鳳三年（前五五年）に薨じた中山懐王劉脩のものと推定される墳墓から出土した、いわゆる『定州論語』（文物出版社、一九九七年）の述而篇には「以學、亦可以毋大過矣」とあるように、今の『論語』述而篇の「以學易」の「易」は本来「亦」である。また、『論語』子路篇の南人有言章は、通行本『礼記』緇衣篇の南人有言章にやや遅れて成書されたものと推測される。郭店楚簡『緇衣』と上博楚簡『緇衣』の諸章は

『詩』『書』を頻繁に引用したけれども『易』は一条たりとも引用していない。それは『易』がまだ儒教の経典となっておらず、儒家とは何の関係もないものであったからに他なるまい。それに対して、通行本緇衣篇の南人有言章が、初めて一章だけ『易』を引用したのは、帛書『易伝』六篇の成書の後、『易』が漸く儒教の経典となりつつあったためと考えてよかろう。要するに『論語』に、孔子が『易』を読んだ証拠はなく、あるとしてもそれはむしろ、戦国末から開始された『易』の儒教化・経典化の所産として、『易』を孔子に無理に結びつけた附会である。（池田前掲論文、三五二～三六一頁）

（論点6）（論点7）（結論）儒家の思想家たちが、戦国末期以降、『易』を経典として取り入れ、『六十四卦』を読んでその注釈『易伝』を書いた理由は、秦の始皇帝時代の知識人弾圧政策の下で民間に所蔵することが許された卜筮の書である『易』を経典として取り入れ、自らの思想活動を続行したという政治上の理由の他に、思想上の理由がある。第一に、従来から形而上学的な思索が不得手であった儒家が、『易』を経典とし、それを媒介として、道家の「道」の形而上学を大量に導入するため。第二に、儒家の思想体系全体をを根底から支え、他の五経、『詩』『書』『礼』『楽』『春秋』にも優る最高の経典を獲得するため。第三に、『易』にもともと具わっている呪術性・宗教性を、象数家の理法的哲学的な「数」の世界や儒教的な倫理的政治的な「徳」の世界に達するための必要な基礎段階として、自己の内に包摂して儒家の思想世界を豊かにするため。（池田前掲論文、三六一～三六三頁）

以上のように見てくると、浅野氏と池田氏の両者の描く『易』の経典化の筋書きは実は、大局的に、『孟子』『荀子』などの伝世文献に依拠する限り儒家が戦国期に『易』を経典化していたとする確証は得られないという点でも、経典の資格がない書物（『易』）をむりやり経典にでっち上げようとしたという点でも、後学の徒が今本『周易』の十翼や帛書『周易』に見られるような易伝を著述してそれを孔子自身の易学の成果であるかのように偽装したという点でも、見解はほぼ共通している。特に「要」篇の著作目的が『易』を四経（『詩』『書』『礼』『楽』）に追加して、新たに経典としての地位を与えるところにあったとする点は、要篇の孔子の弁明（「詩書禮樂、不□百篇、難以致之」云々、□には「止」か「読」かを補う）からどの研究者も共通に読み取れることである。大きく異なるのは、『易』の経典化を開始した時期（戦国前期か戦国末期か）と、孔子の地位を高めること

を目的とする（孔子素王説）か『易』の地位を高めることを目的とする（儒家思想体系整備）かどちらに重点があるかという相違である。目的の重点（優先順位）の相違はそれほど大きな問題ではないが、経典化の開始時期の相違は、両者の成書年代の設定方法の相違に起因する。浅野氏は資料の墓造営時期や書写年代よりも約五十年遡って成書時年代を設定する。例えば『六徳』ならば、郭店一号墓の造営時期の前三〇〇年頃から五〇年遡って成書年代を設定する（その想定方法の詳細は、浅野裕一・湯浅邦弘編『諸子百家〈再発見〉』第一章「諸子百家と新出土資料」、四七～四八頁を参照）。池田氏は資料の書写年代をほぼそのまま成書年代と設定するように見受けられる（その理由は、古代の書物における材料の蓄積と長い編纂の過程を考えれば、様々に年代の異なる材料を編集して、ひとまとまりのその形に書写したときが、ほぼその書物の成書のときと見なせるからだろう、と愚考する）。しかし、帛書要篇の著作意図が『易』に新たに経典の地位を与えることにあるという共通の認識に立脚する以上、内容が関連する諸篇の「関係が、引き下げた時期の中で整合性を保つ結果となる」か、「関係が、今度は引き上げられた時期の中で整合性を保つようになる」か（『竹簡が語る古代中国思想（三）』前掲、三四三頁）というだけで、相互に相似する筋書きになる。結局、要篇の著作時期をより具体的に決定できるかどうかが鍵となる。その場合、特に注意すべきは、要篇中で孔子が「『尚書』多於矣、『周易』未失也。」と説く一節で、『書』『易』ではなく敢えて『尚書』『周易』と呼ぶ意味や、『周易』に対するものとして『尚書』が引き合いに出されている意義や、また、なぜ要篇が『詩』『書』といった孔子以来の重要な経典を軽視して、ことさらに『易』を重視し擁護する言論を述べているのかという点である。『易』の経典化の問題における要篇の重要さはいや増すばかりである。

（近藤浩之）

『五行』研究回顧

一九七三年に馬王堆漢墓帛書五行篇（以下、馬王堆『五行』と略称）が公開されて以降、後の『五行』研究に最も大きな影響を与えたのは、龐樸「馬王堆帛書解開了思孟五行説古謎」（『文物』一九七七年、第十期）である。当論文は、馬王堆『五行』が『荀子』非十二子篇に言及された子思・孟軻の思想を伝えるものとの見解を示した。すなわち以前、『荀子』非十二子篇には「聞見雑

博、案往舊造説、謂之五行、…子思唱之、孟軻和之」という記載が見えるが、『史記』の記載以来、子思の著作として伝わる『礼記』中庸篇や、孟軻の著作として伝わる『孟子』には、「五行」と特定できる明確な記載が確認できない。そのため、非十二子篇の記載が具体的に何を指すのかが、歴史上の懸案となっていた(注1)。そうした中、馬王堆『五行』には、「仁」「義」「礼」「智」「聖」を「五行」と総称する記載が確認されること、全体の思想内容に『礼記』中庸篇や『孟子』との関連を見いだすことができることなどから、これを思孟学派の著作と見なす龐樸氏の見解が大方の賛同を得るに至った。

一九九三年には、郭店楚簡『五行』(以下、郭店『五行』と略称)が発掘され、この竹簡資料は、戦国時代の資料であると報告された。このことから、思孟学派との結びつきを証明する格好の一次資料と目された。一方で、思孟学派の問題に関しては、「学派」の実在を前提にすることや、学派区分に対する欲求が一種の先入見としてはたらくことで、文献の思想内容の客観的な解釈の妨げになる危険性も、一部には指摘された(注2)。

二〇〇八年になると、山東師範大学斉魯文化研究中心・米国哈仏大学燕京学社編『儒家思孟学派論集』(斉魯書社、二〇〇八年)や、杜維明『思想・文献・歴史』(北京大学出版社、二〇〇八年)、そして、梁濤『郭店竹簡与思孟学派』(中国人民大学出版社、二〇〇八年)等、『五行』を一次資料とした研究が活発となり、思孟学派の思想解明を目指す論文集や単著が相次いで出版された。この年は目下、『五行』研究の高潮期の一つに数えられよう。

二〇〇九年以降に発表された『五行』関連の研究もまた、この高潮期の範囲内にあると言える。先ず取り上げるべきは、陳来『竹帛《五行》与簡帛研究』(三聯書店、二〇〇九年)である。本書には『五行』関連の論文として、「竹帛《五行》為子思、孟子所作論」、「竹簡《五行》分経解論:《五行》章句簡注」の他二編を収める。『五行』の思想は、『孟子』の思想と類似することから、孟子学派の作品であり、郭店『五行』は子思の著作、馬王堆『五行』《説》は孟子の著作と結論する。同論文では、郭店『五行』と馬王堆『五行』の《説》(注3)を別の時代、別の人物によって制作された文献と見なし、両者の間に思想上の差異を想定することで、思孟学派の思想的変遷を史的に跡づけることを目的としている。これは、「思孟学派を一つの具体的な歴史的展開の過程と見なす」(梁濤前掲書、六頁)代表的な研究の一つと言え、こうした関心は、現在まで研究者の間に広く共有されている(注4)。

李鋭『新出簡帛的学術探索』（北京師範大学出版社、二〇一〇年）は、『五行』に関する二編の論文を収める。先ず、「〝思孟学派〟的問題」では、「学派」という言葉の意味内容を再考し、思孟学派とは、子思学派と孟子学派との並列の意味であるとする。また、「仁義礼智聖五行的思想淵源」では、思孟学派と『五行』との関連を考察した先行研究を整理し、『尚書』洪範篇の五事（貌、言、視、聴、思）や五行（木、火、土、金、水）、『孟子』の四端説との関連を指摘している(注5)。

孫希国「馬王堆漢墓帛書《五行》篇〝説〟文与《孟子》的関係―兼論何為〝子思唱，孟軻和之〟」（『古代文明』第六巻、第一期、二〇一二年）は、郭店『五行』と馬王堆『五行』《経》と《説》とは、それぞれ同時期の成立ではないとし、馬王堆『五行』《説》に見える「大体・小体説」、「性善論」、「尊賢思想」を『孟子』に先行するものと見なす。

もし、思孟学派の思想的変遷を馬王堆『五行』《経》と《説》や郭店『五行』を一次資料として跡づけようとするのであれば、二つの文献には、具体的にどのような思想的差異が見いだされるのかが解明されなければならない。陳麗桂「再論簡帛《五行》経、説文之歧異」（簡帛網、http://www.bsm.org.cn 二〇一〇年）は、馬王堆『五行』の《経》と《説》との章節及び文字の異同を整理し、馬王堆『五行』《経》には、《説》のような「気」の概念が見られないこと、「仁」「義」と「聖」「智」に対する位置づけ方が異なることを指摘し、《説》を孟子後学の作と見なす。

思孟学派の思想的変遷を跡づけるための予備作業として、或いは、そうした関心とは別に、郭店『五行』と馬王堆『五行』との思想的な相違点の解明自体を目的とした研究も進められている。荀東鋒「簡、帛《五行》経文比較」（『学灯』第二十一期、http://www.confucius2000.com 二〇一二年）は、郭店『五行』と馬王堆『五行』との思想的差異の解明を目指し、郭店『五行』の解釈に当たっては、馬王堆『五行』《説》を根拠とした論証の仕方を避けている。その上で、郭店『五行』は、「徳之行」と「行」とを併せて重視するのに対し、馬王堆『五行』は、「徳之行」のみを偏重するところに、両者の思想的な差異があるとする。また、従来の研究には、時として、郭店『五行』と馬王堆『五行』とについて、その版本としての優劣や、思想の優劣を判定しようとするものがある。同論文は、そうした優劣の評価を下すことの問題点を指摘している。重要なのは、優劣の評価を下すことではなく、それぞれの思想的な特徴を把握すること

にある、という態度を表明している(注6)。

今後も、郭店『五行』、馬王堆『五行』それぞれの思想の解明が重要な研究課題の一つとなることが予想される。曹峰「思孟学派的解構与建構―評梁濤《郭店楚簡与思孟学派》」(『哲学研究』第四期、二〇一〇年)は、子思の思想は、『孟子』『荀子』との関係だけでなく、道家とも密接な関係にあることを指摘する。当然のことながら、例えば、郭店『五行』の思想を解明する場合であれば、単に馬王堆『五行』《説》の解釈を絶対視しないだけでなく、文章や思想概念に対する解釈を他文献の用例を広く精査し考証した上で確定することが重要である。その際、子思や孟子といった具体的人物に作者を特定しようとする関心や、学派区分に対する関心にこだわるために、考証の対象となる文献を予め大きく制限してしまうことは避けるべきであろう。もちろん、考証の対象とする文献の時代性、思想傾向は、十分にこれを考慮すべきことは言うまでもない。

また、梁静「対於判断出土文献学派帰属的反思―以上博楚簡為中心的考察」(『簡帛』第七輯、二〇一二年)は、『五行』を専論した論考ではないが、出土文献の所属学派を判定する基準に対し、反省を加えている。すなわち、「無」や「仁」のような標識的な概念や説話の登場人物を根拠に、出土文献を儒家や道家等の学派に分類することは、あまりに表面的であるとする。文献の所属学派は、結局はその文献全体の思想内容を見て判断されるべきとする。このように、方法論的反省の必要性を表明する論考が出始めていることも、近年の研究動向における特徴の一つと言えそうである。

なお、『五行』の研究史についてまとめたものとして、荀東鋒「簡、帛《五行》研究概述」(簡帛研究、http://www.jianbo.org/二〇一一年)、孫希国「簡帛《五行》篇的発現与研究」(『遼寧学院報』第十四巻第四期、二〇一二年)がある(注7)。また、陳偉『楚地出土戦国簡冊[十四種]』(経済科学出版社、二〇〇九年)は、郭店『五行』に関しても文字の隷定をはじめ貴重な研究成果が盛り込まれているが、本書については、既に湯浅邦弘・草野友子「楚地出土文献へのいざない―陳偉等著『楚地出土戦国簡冊[十四種]』」(『中国研究集刊』(第五十二号、二〇一〇年)に詳しい報告があるので、ここでは割愛した。

(西信康)

注

（1）馬王堆漢墓帛書五行篇の発見に至るまでの思孟学派に関する研究については、影山輝国「思孟五行説―その多様なる解釈と龐樸説――」（『人文科学紀要』第八十一集、東京大学人文科学科、一九八五年）を参照されたい。

（2）池田知久『馬王堆漢墓帛書五行篇研究』（汲古書院、一九九三年）。

（3）馬王堆『五行』は、経文とそれを解説する説文とから構成される文献である。本稿では、経文を《経》、説文を《説》と表記する。

（4）例えば、高正偉「論《五行》説文対孟子仁義観的発展」（『孔子研究』第五期、二〇一二年）、劉光勝「子思与曾子師承関係新証」（『簡帛』第五輯、二〇一〇年）等。

（5）この二編の論文は後に、李鋭『戦国秦漢時期的学派問題研究』（北京師範大学出版社、二〇一一年）にも集録されている。

（6）この他、Dirk.Meyer "Philosophy on Bamboo, .Koninklijke Brill NV. 2012. p85-p86, p129-p130 もまた、同様の態度から、郭店『五行』を馬王堆『五行』の直接的な祖型と見なすことを問題視している。

（7）この他、本文では言及しなかったが、筆者が目睹した二〇〇九年以降における『五行』関連の研究成果としては、孔徳立「外在之行与内―心之徳的貫通」（『中国哲学史』第三期、二〇〇九年）、Kenneth.W.Holloway "GUODIAN: the newly discovered seeds of chinese religious and political philosophy". Oxford University Press.2009、曹建国『楚簡与先秦《詩》学研究』（武漢大学出版社、二〇一〇年）、薛元沢「郭店楚簡《五行》〝君子愼其独也〟之解釈」（簡帛研究、http://www.jianbo.org/ 二〇一〇年）、薛元沢・詹文娟「由郭店楚簡《五行》「能至哀」釈詩経「之子于帰」――兼釈〈邶風・燕燕〉等相関詩篇」（簡帛研究、http://www.jianbo.org/ 二〇一〇年）、荀東峰「郭店楚簡《五行》釈義」（『古籍整理研究学刊』第四期、二〇一一年）、廖名春「簡帛《五行》篇〝不仁思不能清〟章補釈」（『出土文献研究』第九輯、二〇一〇年）、周玲・劉志基「楚簡帛文字筆記分析方法芻議――以《郭店楚簡・五行》第一〇、一一簡文字異写分析為例」（『中国文字研究』第十五輯、二〇一一年）、王暉「聖、智之弁与早期儒家的認識観」（『中国哲学史』総第七七期、第一期、二〇一二年）、王中江『簡帛書文明与古代思想世界』（北京大学出版、二〇一二年）、梁濤・斯雲龍編『出土文献与君子慎独―慎独問題討論集』（漓江出版社、二〇一二年）、孟慶楠「徳行内外―以簡帛《五行》篇為中心」（『中国哲学史』第二期、二〇一二年）、陳耀森「読楚簡《五行》篇〝五行〟的序列」（簡帛研究、http://www.jianbo.org/）等がある。